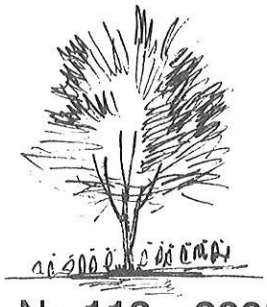
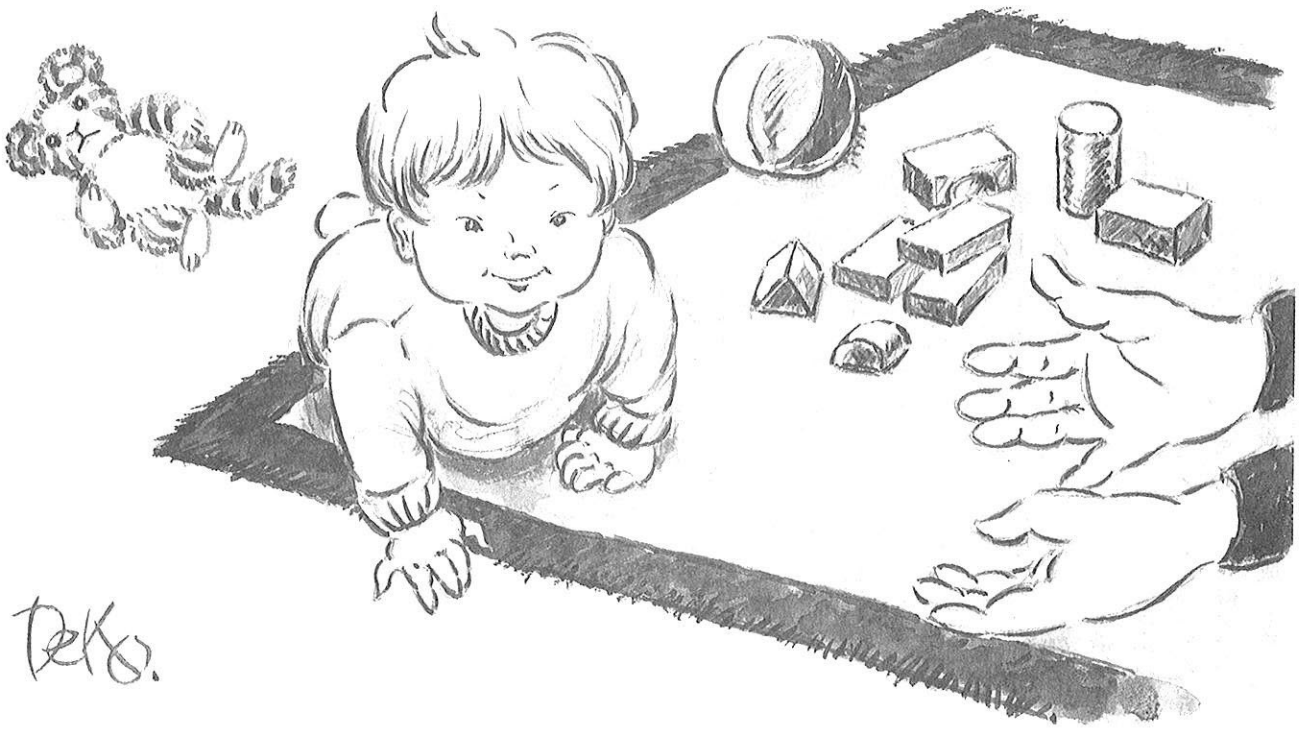
ひかりのこ

光の子



No.113　2005.4.1

●今年の聖句　あなたがたは何をするにも、人に対してではなく主に対するように、心から行いなさい。(コロサイの信徒への手紙３：23)



「もうすぐ　あんよも　できるよ」　挿絵・中島英子

「雛の家」

冬障子をとこが淹れし茶の香る
待ってゐるらしき焼き芋を掌に包み
ちやんちやんこ連れて戻りしちやんちやんこ
昼の灯の格子を漏るる夕霧忌
岐れてはまた添ふ流れ猫柳
立春の日を溜めてゐる万華鏡
木洩れ日の畳に遊ぶ雛の家

黛　まどか（『ヘップバーン』主宰）

発行／社会福祉法人　光の子どもの家　TEL/0480-72-3883　FAX/72-6649　振替／00130-1-128022
編集／光の子　編集委員会　e-mail:khikari@ceres.ocn.ne.jp　〒349-1155 北埼玉郡大利根町砂原277　印刷／プリンテング瑛和

社会的養育は社会的自立まで

施設長　菅　原　哲　男

児童養護施設光の子どもの家は、定員いっぱいの三十六名の子どもたち、措置外六名、職員二十四名で、二十一回目の年度が始まった。

ここで措置外という子どもたちの存在を説明しなければならない。

児童福祉法は子どもの年齢を十八歳と規定している。一九九七年当時児童養護施設の目的に、収容保護に自立支援を加えて児童福祉法が改正された。その改正作業で、一八歳の社会的自立について論議があった。

一般には義務化されたような高校進学と全国平均の大学等への進学率は、専門学校を含めると八〇％をはるかに超えているのである。

そのような状況を鑑みて、自立を実現するために措置延長という制度を設けたのであろうと考える。

児童福祉施設等に入所した児童が、十八歳に達しても施設に入所を継続する必要がある場合には、二十歳に達するまで（場合によってはその後も引き続き）更に施設入所を継続させることができる。（法第三十一条、附則第六十三条の二）と定められている。

しかし、（平成八年一月二十九日児家第一号厚生省児童家庭局家庭福祉課長通知）は、「措置解除後、大学等に進学する児童への配慮について」で、進学等をする者について措置解除後も施設で生活することを生活実費を支払うなどの条件を付して認めた。これによって進学や就職して社会的自立を志す者に措置延長の利益から排除して、措置延長制度利用可能な者は、身体及び精神、知的に著しい障碍を持つ者に限ってしまったのである。

私たちは、入所依頼を受けた時点からその子どもについての社会的自立を目指して養育するのである。それが法が定めた目的条項に沿ったものと考えてきた。一八歳で家族の支援なしに社会的自立が可能だろうか。成長にとって重要な乳幼児期に不適切な生育をされた者たちなのである。

これまで私たちも困難な障碍を持つ子どもたちへの養護学校高等部卒業までの対応をしてきた。知的、あるいは身体、精神に障害を持つ者については、その社会的自立に適切な専門知識や技術を持つ障碍児・者福祉等の法に基づいた施設やサービスが児童養護施設より良質な条件などによって幅広く展開されている。その障碍の程度によって長期間自立訓練・促進しなければならない子どもたちについて、児童養護施設における措置延長は不適切といえる。

これでは措置延長という制度は何のためにあるのだろうか、その存在意義を探し得ないのが現実なのである。

平成十七年度版児童相談所運営指針における措置延長は、特に子どもの自立を図るために継続的な支援が必要とされる場合には、積極的に在所期間の延長を行う、が付加された。

これは、児童養護施設に障碍者施設の代用を迫るものなのだろうか。

もう一度、措置延長が制度化された経緯及び法の精神に立ち返ってみよう。高卒後就職してもアパートを借りる代金や生活費を稼ぐに追いつけない状態が続き、進学した者たちは長期休暇時の稼働によって教育費の支払いが精一杯であり、生活実費などは夢想に過ぎない状態を考慮する時、二～四年程度の措置延長による生活保障があれば、就職した者も、部屋代や非常時への備えをして、進学した者たちは卒業・就職して社会的立を獲得すると考えることが適当ではなかろうか。

措置外とは、社会福祉法人光の子どもの家は、措置解除後（公費負担ゼロ）の二十三歳を頭に六名の子どもたちが私たちの「家族」として暮らすことを可能にしていることなのである。

社会的養育を必要とした子どもたちが社会的自立を獲得するまでの関わりについて、制度運営当局者たちに問い返したい。

2つの文化に生きる 46

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー　京　子

イースターの喜びが今年ほど身にしみたことはなかった。桜の蕾がまだ開かない朝晩の寒さがまだまだ続く三月末、東大宮教会には一人の受洗者と三人の信仰告白者の合計四人の若い教会員が与えられた。その中の二人が我が家の息子、娘になるとは数ヶ月前までは思いもよらないことだった。これは私たち夫婦の信仰が云々というよりもまさしく子どもたちは教会に育てていただいたからだと思う。私たち夫婦がただひとつ胸をはって言えるのは雨の日も風の日も晴れた日も、病気のとき以外はひたすら週の始めの日曜日は教会で礼拝を守ることを子どもたちに教えたことだけだと思う。はっきり言ってそれ以外なにもしていないのではないだろうか。二人とも生まれる前から教会に通っているので今年二一歳になる息子は約二二年間、クリスマスに一八歳になった娘は一九年間、教会に通ってきたことになる。

いつの間にそんなに時がたったのだろうか。子どもたちが原田牧師より幼児洗礼を授かったのが遠い昔のようでもあり、ついこの間の出来事のようでもあり、複雑な気持ちである。子どもたちが小さい頃は日曜日の朝、一緒に家を出るのは大変なことだった。特に息子が小さい時はよく動く活発な子だったため、教会に行ってもゆっくり説教も伺えないことが多かった。そんな時、原田先生にはご迷惑をおかけしたこともあった。ある聖餐礼拝の聖日、教会に行ったが、息子が走り回っているので勿論礼拝堂には入れない。礼拝堂横の和室にもじっとしていない。もう一組の親子と一緒に和室横の廊下を通り抜けて牧師館の応接間に移動した。そこに行くとマイクが通じていないので礼拝堂で何が起こっているのかまったくわからない。ソファーのあるその応接間は子どもたちのいい遊び場になってしまった。ジャンプしたり、走り回ったり、その上けんかまで始まってしまった。とうとう私の我慢の限界も超えた。息子をしかりながらどれだけの時がたっただろうか。気がつくと礼拝堂の方から人が庭に出てくる声がした。なんと礼拝が終わってしまったのだ。私は慌てて、礼拝堂に駆け込み、先生にこう言った。「聖餐礼拝に出席するために教会に来たのに聖餐が受けられませんでした。私ともう一人のお母さんのために今、聖餐を授けてください。」すると先生は静かな口調で「わかりました。」とおっしゃり、牧師館の応接間で私とそのもう一人の方のために聖餐式を始めから終わりまで厳かにしてくださった。今思うとなんと自分本位な行動だっただろうと少し後悔の気持ちもあるが、あの時の聖餐式は今でも忘れない特別なものだった。

ところで子どもが大きくなったらなったでそれなりにまた障害があった。自立心が出てきて親の言うことをきかない。それでも日曜日は家族で教会である。けんかしていても教会。行きたくなくても教会。祈れなくても教会。眠くて眠くて説教が耳に入ってこなくても教会。子どもたちには「私たちの家族の一員である限り日曜日は教会に行くこと」をずっと通した。教会に通うこと自体がんばらなければ実現できなかった子育ての時期もあったが、本当は日曜日に教会で礼拝を守ることは、私たちが空気を吸って生活しているように、生きていくために不可欠な自然なことなのだと思う。

最近、毎晩寝る前に聖書を読んでいる娘とは信仰の話ができるようになった。先日、娘は学校の卒業旅行から帰ってきた。タイ・チェンマイ近郊で孤児院や村を訪問して奉仕活動をしてきたのだ。帰ってきた娘がなぜか少し大人になったような気がした。娘の口から出た一言がわたしのこれからの宝物になりそうだ。「あのねえ、自分のことばかり考えているから悩みってあるんだよ。神様中心に生活していくと悩みはなくなるんだよ。」

二人とも信仰告白をした今、がんばらない自然な教会生活をしつつ、家族がどこにいても神様の招きに答えられる人にこれからも育っていってほしいと思う。

学者もどきのつぶやき ⑥⑦

早春の日に

山形大学
学長　仙道　富士郎

いつもながらの不確かな記憶なのだが、以前「光の子」に同じようなことを記したような気がするのだが、二度目でもいいからまた書きたいと思うのは、東北地方の日本海側に住んでいる人間にとって春の訪れはやはり特別なものなのだということだろう。それにしても私のいましたためている原稿が「光の子」の読者の目に留まるころには、春爛漫、あるいは地方によっては桜の花も散った頃で、私の文は著しく季節にはそぐわないものになっていることは間違いない。しかし、私の文を読んでくれる人達のことなどいまは気にしていられない。

山形から仙台への特急バスの中から見る景色の感じが、笹谷トンネルを通り過ぎて宮城県側に入るとガラリと変わる。遠くに見える山並みは柔らかな陽の光に白く輝いている。何と言っても雲の少しかかった薄青色の空の色がいい。いや私の文章力ではとてもこの感じを表現するのは無理というものだ。

山形では、昨日はフワフワした春の淡雪が舞っていた。雪国の人間にほのかな望みを与えてくれる早春と言うのはまだためらわれる。今年は大雪だったし、その分春も遅いのかもしれない。

半年近い間鉛色の空のもとで暮らすのはこれからの老いを思うとつらいかもしれないなどと、陽の光をあびるバスの中で考えたりしているうちにバスは仙台に到着した。バスを降りると、思いの他風は冷たい。仙台だからと妻が私に用意したコートなしの格好では寒すぎる感じである。四十年以上もまえ仙台で過ごした高校生の頃のことを想い出し、冬は風の強い日も多かったかもしれないなどとかすかにそのころのことが脳裡をかすめる。目抜き通りの一番丁を散策していると、高校生の時に通った映画館や、ぶ厚さが売りのとんかつ屋や、大きな喫茶店のことなどが脈絡もなく想い出される。四つ角にあったはずのその喫茶店のことを妻に聞くと、大分前に閉店してしまったという。

裏日本の東北の春の訪れは遅くても、毎年卒業生を送り出す言葉を綴る者にとっては三月は若者達から生気をもらって若やぐ季節である。山形大学は信州大学と一、二を競う蛸足度の高い大学で、キャンパスは四カ所に分かれている。大学の本部がある人文・教育・理学部の小白川キャンパスと医学部の飯田キャンパスは山形市内に位置していて問題はないが、工学部は車で一時間の米沢市内に、農学部は出羽三山の山を越えて二時間の鶴岡市にある。何年も前から卒業式は鶴岡、米沢、山形の順で三回行う。卒業の時ぐらいは一緒に集まったらという私の提案は途中で頓挫し、今年も私は卒業式旅道中としゃれこんでいる次第。

農学部での卒業式では失態を演じてしまった。この学部の位置する荘内では、この季節でも突然猛吹雪に見舞われることがあるようで、事実十年以上も前の話だが、卒業式当日早朝に山形を出発した学長の車は途中猛吹雪に出合ってしまい、学長が鶴岡の卒業式会場に到着したのは、開式時刻十分前だった。それ以来少なくとも学長は卒業式前日に鶴岡に入ることになったらしい。

今年も、私と総務課長が卒業式前日に鶴岡入りし、その夜は農学部長、評議員等と会食した。次期学部長予定者の教授が長いこと海岸林の研究をしており、わが国の権威の一人であるという。海岸林は防潮林として世界各地の地震津波の被害を軽減した歴史があるという彼の話が契機となって、今回のスマトラ沖大地震の津波被害へと話は進んだ。山形大学が中心になって海岸林植林プロジェクトを立ち上げるために現地へ調査団を派遣しなければならない…。その辺まではお酒は入っていたが、皆筋道の通った話をしていた。事実このプロジェクトは現在進行中である。

そのあとがいけなかった。「山形大学はがんばるぞ」と意気軒昂、ホテルのバーにくり出す。報いとして卒業式当日は酒で声がつぶれてしまい、のど飴をなめてもいかんともしがたい。

それにしても、袴姿の卒業生代表の答辞は灰谷健次郎を引用して切々と訴え、私は壇上で涙してしまった。彼女の答辞が、過ぎし青春を想い起こさせ、私を春の気分へと誘った。春は私にとってほのかな望みを抱かせ、喜びを与えてくれる特別な季節である。

エッセイ

ハイビスカス

彫刻家　中島　睦雄

かつて私は、〝ミニ家出〟と称して四、五日間一人で絵を描きに出かけたことがある。

沖縄の竹富島が好きで、何回も訪れることになったのだが、特に、青い海、民家の赤い屋根、赤い花などが印象的であった。それに、道端に絵の具類を広げ、キャンバスを立てて、のんびりと絵を描いていると、恐ろしい現実の世界から、一時的にせよ逃避でき、絵に没頭できた。

その竹富島から持ってきたハイビスカスは、改良を重ねた大輪の花ではなく、やや原始的なものであろうか、花蕊が長く垂れ下がっている。花の色は朱色がかった赤。きれいだ。

私は、庭の陽当たりの良い所に地植えする。そうすると、夏には次々と咲き続け、毎日毎日楽しませてくれるのである。ずい分長く咲き続けるものである。十一月に入っても咲いた。しかし、この頃になるとさすがに花は小さく、その代わり色が濃くなり、一層きれいになるようであった。そんな花を見ていると、どこかで読んだことのある一句が頭に浮かぶ。

初冬の濃くて小さき二番咲き

この句のように、少し寒くなるまで花を見せてくれるのだが、その後が残念なことになってしまう。つまり、こちらがぼんやりしているうちに初霜に会うのである。霜に当たったら花はイチコロである。慌てて覆いをかけてやっても、もう手遅れで、いつの間にか枯れてしまうのである。

私はこんなことを何回もくり返した。今年こそ、今年こそは早く鉢に堀り上げて部屋の中に入れてやろうと、何度も決心しては実行できず、その度に花には申し訳ない結果を招来していた。

ところが、昨年の秋は例年の私ではなかった。少し早いかなと思われる時期に、小さな鉢に掘り上げて、寝室の窓際の陽の良く当たる机の上に置いたのである。ここなら安心である。そこで、朝晩そのハイビスカスを注意深く見守ることを怠らなかった。咲いていた二つの花は植え替えた関係からか、間もなく落ちてしまったが、室温は充分だし、水さえやっていればもう安心である。

以前私が学校に勤めていた頃、三階の南に面した明るい美術準備室で、一月の二日三日頃にも花が咲いていたことがある。正月の新春写生会と称する部活動の時、和服姿のモデルさんのうしろに、咲いているハイビスカスの鉢を置いたのである。真夏の花が真冬に咲いたので嬉しかった。あの美術の部屋は、冬の間でも部活動の関係で完全に冷え込むことがなかったのかも知れない。

しかし、友達のS君は言った。「夏には夏の花を楽しめば良いし、冬には冬の花を楽しめば良いんだよ。夏の花を冬に楽しもうというのは、まあ、邪道というもんだな。」

そう言われてみればそうなんだろう。それぞれの季節にそれぞれの花を楽しめば。

しかし、ハイビスカスに限って私には、特別な思い入れがあって、本道も邪道もないのである。私は、別に通人でもなければ風流人でもない。ただあの花が咲いていてくれれば良いだけなのである。

昨年の秋に鉢取りをしたハイビスカスを、私は本当に愛情深く育ててきた。「ハイビスカスは、太陽の温度と水さえあれば、いつでも花を咲かすんだよ。」という誰かの教えを忘れないようにして、水だけは充分やるようにしていた。それが私の、ハイビスカスに対する愛情の表現なのである。暖かくなったら肥料もたっぷりやろう、そう考えていた。

ところが、私の深い愛情を裏切るように、何だか葉っぱのあたりが弱ってきたのである。

どう見ても生気が失われていくようである。私は、一日も早く花を見たいと夢中だったのに、咲く前に本体が枯れてしまうかもしれない。少々不安になってきた。

四、五人でお茶を飲みながら雑談をしている時、私はハイビスカスの現状を話してみた。すかさずTさんが言った。「そりゃあ水のやり過ぎですよ。根腐れを起こしているんです。」そして加えて、「うちには三人の子どもがいるんですが、一番上の子は水のやり過ぎで根腐れを起こしてしまって自立心が弱いんです。三人目の子になったら、こっちが忙しくなって放ったらかし、水なんかやれなかったけれど、この子が一番自立心が強く、たくましく育ったんですよ。愛情過多はダメです。」と続けた。

一緒にいた人達は一斉に大笑いしてしまったが、みんな少しずつ思い当たる節があるらしかった。

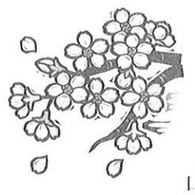
ハイビスカスも人間も、水のやり過ぎはダメか。

プ・リ・ズ・ム

子どもたちの季節　仙道家

桜吹雪が舞う、心が浮き立つ春がもうじき訪れようとしています。二年前に心も体も傷を負いここに来たさくらは今では笑顔が愛くるしい女の子に成長しました。幼稚園でたくさんの友達と友情を育み、最近では喧嘩をしあえるほど自分を表現できるようになりました。さくららしい花がいつまでも咲き誇れるようたくさんの愛情を注ごうと思います。私もさくらを照らす太陽的存在になれるよう遠くから見守っていこうと思います。

山口　麻衣子



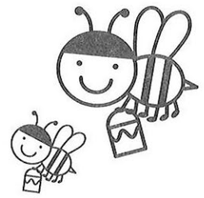
原田家日記

四月になり原田家の子ども達も学年が一つ上がり、昨年中学、高校へ一人で入学した女の子も、もう「先輩」になります。

子ども達にとっての一年間は私達大人にとっての一年よりも大きく、日々成長、変化していく子ども達は一年前とは全く違った姿を見せています。原田家では受験生が二人となります。彼等にとってこの一年間はとても大切なものとなることでしょう。

一年後のこの時期、咲き誇る桜の下で彼等が晴れやかな気持ちで新たなスタートラインに立てるよう、未来を切り開くその姿を見守りつつ、応援していきたいと思います。

遠藤　めぐみ



季節のおとずれ　市川家

梅の花も咲き、春が近づいてきていますが、皆様いかがお過ごしですか。

二月に中学三年生の郁奈ちゃんが光の子どもの家にやってきました。受験直前、そして今までと全く違う環境、様々な要因が重なり沢山の不安を表現してきました。自分の思いよりも、人がどう思うか、期待に応えなければならないという思いが強い女の子です。自分のことのように相手の思いを感じてしまう優しい、そしてとても繊細な心をもっていると強く感じます。その心を大切にしながらも、これからは自分の思い、考えを言葉にして表現できるように応援したいと思っています。

グループホームで生活している郁奈、美季、要、美也子は卒園、卒業、入学を迎えます。静一は進級します。幼稚園に入園したばかりの頃の要、美也子を思い出すと今の二人は本当に成長したなと思います。ちょっと自慢させて頂きます。(笑)先日幼稚園でマラソン大会がありました。なんと、一位は美也子、二位は要と上位を双子で独占しました。

小学校、中学校、高校と新しい世界に飛び立ちます。ひとりひとりが自分の力を発揮できるように、子ども達の心の声に耳を傾ける努力をしていこうと強く思います。そして、「また明日がんばろう」と思える毎日を子ども達と創っていきたいと改めて感じています。

市川　美穂

光の中で　佐藤家

一年を一日に例えると、春は一日の始まりのような気がします。まだ暗い明け方、寝ていたい誘惑にかられそうになりながらそれを

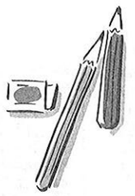
のりこえ身支度をして外へ出ると、日はすでに昇りはじめ青い空と少し暖かい風が迎えてくれた。

この春高校進学に向けて頑張っていた四人の中学生達。無事受験を乗り越えることが出来た今、そんな清々しい気持ちでいることでしょう。

どんな一日(一年)にしていくか、それは自分たちで決めていかなければならない年齢です。多くの誘惑や分かれ道に悩まされる事もあるだろうけど、自分の選択に自信と責任を持って歩んでいってほしいと思います。

この偉大なる個性派四人組を、四天王ｊｒと命名しました。

小西　剛史



河のほとりで　倉澤家

中学三年生の乃衣は、先日希望する高校に入学できることになりました。

中学入学と同時に入所してきた乃衣は、「高校なんか絶対に行かない。勉強嫌いだもん。」と高校進学を拒否していました。しかし、この三年間で彼女に変化が見られました。相変わらず勉強は苦手で、成績も良いわけではありませんでしたが「高校に行きたい。」そう思うようになったのです。

彼女の心を動かした要因の一つは、共に暮らす先輩達の姿だったのではないかと思っています。

部活に熱心に取り組み、充実した高校生活を送っている高校二年生の友那。高校を無事卒業し、就職も決定して新しい生活に向けての準備を着々と進めているヒロミ。自分の目標に向かって黙々と頑張り続けている卒園生の沙慧。そして、社会人四年目を迎え職場ではすっかり頼りにされるようになった亜希。こんな仲間達に支えられ、自分の将来のことをしっかりと考えられるような乃衣に成長することができました。

特に介護助手をしている亜希の影響は大きく、「亜希ちゃんみたいな仕事がしたい。」と更に目標が具体化してきています。そんな目標に到達できるよう、これから始まる高校生活を有意義に送ってほしいと願っています。

そして、目標を持つことの大切さや楽しさを後に続くたくさんの後輩達に伝えてほしいと思います。

倉澤　智子

あかり窓　心理室から

陽射しがすっかり春めいてまいりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか？

ここの子どもたちはサッカーが大好きですが、サッカーは芽吹いてきた園庭の草木を傷めてしまうので禁止されています。子どもたちは怒られるのですが、サッカーをしたい欲求には負けてしまうようで繰り返していました。そこで最近大人の側が工夫をして、鉢植えを置いて物理的にサッカーをするのが難しい状態にしました。すると子どもたちはその鉢植えを線引きとし、ネットに見立ててバトミントン等をするようになりました。

草木を大切にできる気持ちも育てたいけど、遊べる環境も作ってあげたい…と思っていた私ですが、作ってあげなくても自分たちの知恵で遊ぶことができるのだなと頼もしく思えるようになりました。

積　みどり

養護メモ 106

家族に関わる その6

菅原 哲男

児童養護施設など社会的養育に関わる施設が、その子どもの入所依頼を受け容れるということは、その子どもの生活総体を受けとめて、共に暮らしていく中で、その子どもが受けてきた病や傷などを癒しの成長を促していくことなのである。

それはその子どもの「家族」になることを意味すると考えてきた。

複数の大人が子どもと暮らすという条件があれば家族と規定するのである。ここで血縁は問わない。同居も芹沢俊介は条件にしていない。（「ついて行く父親」）私たちもこれを採る。

ある年の夏、小学生の女の子が児童相談所職員に連れられて、見学に来た。

その子が、気に入ったらここを利用するという。かなり先進的な考えを実行する児童相談所職員である。

その子は、混合家族の母の連れ子であった。

その子はここを気に入ってくれて入所してきた。同行してきた母親は、これもそのころから日常であった親たちが必ず問いかける「いつになったら返してくれるのか」を執拗に聞いた。

児童相談所に親族などから通告があって不適切な関わりを疑われてやってくる親たちに共通した対応なのである。

「躾をしただけなのに、他人様に何が分かるものか」、とあからさまに、虐待を疑われたことに不承知であることを表出するのである。

とりあえず、ここでの約束事を確認する。

ここは、あなたの子どもたちやあなたのために建てられた家なのです。だから遠慮などはいりません。

面会は子どもの生活に入れてはいけないという条件がない限り制限がありません。子どもの生活場面にはどこでも入ってもらって結構です。

面会は、前もって担当の職員などと約束をして下さい。子どもたちが行事などで出かけることがありせっかくおいでになってもお会いになれないと困るでしょうから。また、子どもに前もっての約束はしないで欲しい。もし、不可抗力的なことがあって約束を守れない時に、親たちへの不信を強化してしまうからです。

面会時にお菓子やおもちゃなど出来るだけ持ってこないで欲しい。出会うことだけで充分な関係を願うからです。

いつも何らかのおみやげなどを持ってくると、来た大人よりも何をもってきてくれたのか「モノ」の方に気がいってしまうからです。人格よりもモノという時代の子にますますなってしまうことを避けたいからです。

はじめの半年ぐらいはここで子どもがしている生活の中で過ごして下さい。

ここで子どもがしている生活が不適切であった場合などそれを私たちに伝え、よりよい暮らしにしていきたいからです。

遠い親戚が、軒増えたと思って下さい。

あなたのいのちであるお子さんを預かるということは、この国の少し前までは親戚がその役割を果たしていたからです。

などなどである。

その母親も少し苛立ちながら聞いていた。

何とかなりそうだったので、「もし良ければ今日、子どもと一緒に出来るだけここに長く居てやって下さいませんか。」と聞いた。

少し怪訝な顔をしてこちらを見たので、「リレーなんです。子どももここでの生活がどんなものか不安でいっぱいのはずです。そしてあなたもそうでしょう。だから、一緒にいてあげて欲しいのです。おやつも、夕食も、入浴も一緒にしてあげて下さい。そしたら少しは安心でしょう。」

母親は、その夜継父に電話をして泊まり、何年かぶりでその子どもと一緒の布団で寝た。翌朝早く電車で帰っていった。帰りは来た時よりもいい顔だったと聞いた。

私たちは「家族」になるのである。最初は遠い親戚になれればいいのである。そこからかなり近い親戚になり、家族に限りなく近づいていくのである。

母親は、再婚相手の子どもが出来てから家庭が不調になったと訴えた。子どもたちにとっての継父は、実父や母親と知り合いであり、かなり密接な関係にあったようである。

再婚する時は「きっとあいつよりもよい父親になってやる」と、意気込んでいたという。それからの特に継父の努力は相当なものだったという。そして自分たちの子どもが生まれて家族関係が暗転していったのであった。

その子の名前を仮に珠恵とする。珠恵は、先に見学に来て入所を決めたこともあり、生活にほとんど問題なくとけ込んでいった。

児童相談所の良質のアセスメントや誠実な取り組みと共に、家族に開放できる程度のここの暮らしの質量が家族に関わる基準になる。

現場から

続・光の子らしく ⑯

岩崎 まり子

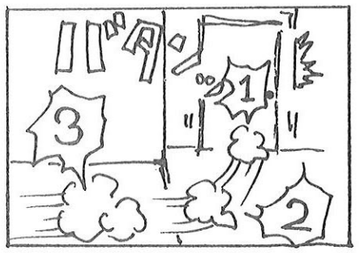
卒業、入学の季節を迎え、皆様の中にも〝六年前のこの子〟や〝三年前のあの子〟と、かつてのあの頃に思いを馳せている方もいらっしゃることでしょう。

光の子どもの家でも「出発の会」を迎えるにあたって、私も一雄君との十二年前の出会いのことやこれまでのことを思い出しています。

十二年間という長い年月、全てに担当者として関わった訳ではありませんが、最初の数ヶ月と―とりわけ最後の数年間に関わらせてもらったことは私にとって大きな財産となりました。自分という人間が、どんなに小さくて情けなくて弱い存在であるかを思い知らされ、それは同時に目の前の子どもたちの大きさや強さを改めて知ることでした。そして私は、まだここに居るということを意識させられたのでした。

一雄君は心に病を抱えています。病識はありません。何度も話はしてきましたが、決して認めたくないのです。それが自身の病気の受け入れを拒否する無意識の行動となっており、薬をきちんと飲むという習慣につながらないのです。薬を飲んでいる一雄君は、今現在のようにとても穏やかに人と接することができます。

しかし、状態が悪くなると引きこもりが激しくなり、薬を飲ませることもままならなくなり、より一層状態も事態も急速に悪くなります。これまでも何度かそういうことがありました。



彼なりの理由はあるのでしょうが、全くこちらの理解不能な理由、状況の中、いきなり蹴飛ばされたり殴られたり、障子の向こうで不気味に高笑いされたり…。会話が成り立たない相手、理不尽な暴力にさらされ、私は心身共に傷つき、就寝時に部屋のあらゆる開閉できるところに突っかえ棒をして、それでも眠れない日々が続きました。自分の思わぬ弱さとそれの引き起こす怒り。〝それなのにどうして、彼のためにご飯を作ったりしなければならないのか〟

あらゆることに納得がいかない―私は自身の心の健康を守るための一つの手段として、ある痛みの時点で心にフタをし、頭で自身の納得いくよう考え、心を静めていくことにしているのですが―あの時の暴力的な状況は私の耐荷量をはるかに超えていたのでしょう。

納得できない、という暴力にさらされる生活、そしてそれを強いられる苦痛。自分が一番辛いと思っていた生活でしたが、ここに入所せざるを得なかった目の前の子ども達や、もっと世界中に目を向ければ、それこそ数え切れない命が、もっとひどい日常にさらされている現実がありました。一雄君もその中の一人…。その内の誰が一言の泣き言でも言っているだろうか…。

一雄君は、その後処方された薬が合い、つきものが落ちたように穏やかになりました。

ずっと昔のことのようですが、私は決して忘れはしません。目の前に居る、どんな小さな子どもたちとも、私は肩を並べることなどできないという現実。私が持っているようなまやかしの自尊心でなく、彼等こそ本物の自尊の心を持つ資格があるという真実。そのことのために、それを伝えられるような働きができるよう祈るばかりです。

卒業式の朝、「こうやって起こすのも最後だね。」と言う小西指導員に抱きついて泣きじゃくった一雄君。毎日毎日、登校拒否気味の彼を起こしてバス停まで連れて行くのは決して楽なことではなかったはずですが、報告してくれた時に小西さんは「この仕事してて良かった。」と言ってくれました。日常の中にドラマがあり、それに気付いた者たちが一緒につくってくれる生活こそが光の源になると信じています。感謝。

今年度も基準外職員確保の為、
第11回バザーを行う予定です。
バザー用品のご協力、
よろしくお願いします。
＝光の子どもの家バザー実行委員会＝

日誌抄 ＝子どもと創る暮らしの風景＝ 12月1日▶平成17年1月末日

２００４年１２月
幼児１０名小学生１３名中学生８名高校生６名措置外４名
計４１名
４日　銀座ベンチャークラブより４名来訪
６日　原道小学校教師との懇談会
１０日　越谷児童相談所訪問調査
１３日　さいたま児童相談所訪問調査
　　森公子さんご招待ディナーショーへ
１４日～１６日
　　北海道方面家庭訪問正月帰省に向けて調整
１６日　田村様散髪ご奉仕　感謝
１９日　近距離家庭訪問開始
２４日　キャンドルサービス
２５日　クリスマス祝会　ページェント
２６日　中学３年生願書を取りに各高校へ
２７日　おもちつき
＜１２月の物品ご寄贈者＞
松本明子　二本榎幼稚園　大橋清栄　山中　若林良三　泉田
㈱サンアイコーポレーション　宮沢嘉枝子　鈴木史乃　松崎
仙道喜美子　仙道桂子　仙道清太郎　森田　土信田隆　岡本
かもめ文具　㈱ステラ　小林　宝月寿子　ほっかほっか亭
鎌田和子　対崎加奈子　川口教材センター　元和郵便局
江森百合子　島崎なぎさ　他多数の各位様

１月
１日　元旦礼拝
５日　正月気分をぶっ飛ばそう会
１１日　佐藤協子先生来訪　職員へのアドバイスを
１５日　中学３年生３名受験を目前に模擬テスト
１３日　田村様散髪ご奉仕　先月に引き続きのご奉仕　感謝
１７日　梅沢三保様ご逝去
　　子ども達全員と告別式へ参列
１９日　南児童相談所訪問調査
　　熊谷児童相談所訪問調査
　　大利根中学校教師との懇談会
２５日　県内児童養護施設同仁学院職員来訪見学
　　佐藤協子先生来訪　職員のメンタルヘルスケア
２６日　中学３年生受験高校へ願書を提出に
２７日～２８日
　　菅原施設長、田中副施設長、中川指導員が横浜で開催されるグループホーム研究会研修会に参加
３０日　華美、真帆、里奈の作品が埼玉県児童生徒美術展北埼玉地区展に展示
＜１月の物品ご寄贈者＞
大川誠子　河野一孝　井口　松本明子　小田切まゆみ　篠塚
中島明美　島田みどり　埼玉県ヤクルト協会　他多数の各位様
感謝してご報告致します。（くら）

反射光

☆おかげさまで二一回目の年度を迎えることが出来ました☆年度替わりは人と人との別れや出会いが交錯します☆ようやくけんかが出来、凭れかかる日常が出来た二人の担当者が寿退職しました☆二人の高校卒業生も出発ちます☆新たに四名の職員が就任しました☆新しく担当になったばかりのところに子どもたちの不安定や寂しさや悲しさが可愛い悪戯とも言える「ワルサ」で表現されます☆そんなワルサを放置するわけにはいきません☆本当はよい子になりたいと思っているんだけど、どうしてか悪いことをしてしまう・・と子どもが泣きながら謝ります☆けじめとして伝えるために叱りながら熱いものがこみ上げてきます☆来たばかりの担当者と少し年かさの指導員が一緒に謝り、みんなの心の中に君がいて君のことを大切にしている、ことを伝えて収束します☆収束した後に残る自らのワルサに心が痛みます☆そんな私たちの新年度☆何とか暖かい家にするために励みます☆更なるご支援を！　（哲）